日本社会学の形成と同志社

青井　厚

序　説

私が今度定年退職にあたり記念講演を依頼されたとき、その演題の決定に相当迷ったのである。その揚句、かつて『人文学』[1]に「日本社会学史の一齣」と題して、明治期における同志社出身者や同志社と関係の深い人々で社会学に関心のあった人々をとりあげ、先ずラーネッド・山崎為徳・浮田和民の三人を論評したのであるが、そのあとが未完成なので、それを完成することが義務とも感じ、演題を早速に「日本社会学の形成と同志社」に決めて、ラーネッド、浮田和民に元良勇次郎、中島力造、村井知至、大西祝、岸本能武太、安部磯雄、ロンバード、米田庄太郎を加えて講演を終えたのである。

幸にも今回講演の内容を本誌に寄稿する機会に恵まれたので、講演の場合は時間の制約のため不充分な点がありそれを本稿では加筆訂正し、すなわち、講演で割愛した山崎為徳を加え、また新しく福祉関係を考慮してオーティス・ケーリと留岡幸助を追加するなど配慮したのである。尚本稿では前述の通り、ラーネッド、山崎為徳、浮田和民らはすでに『人文学』で一応述べているので、できるだけ重複を避けて要点のみ記し、新しく不足の点を補充した。

以上一三名の学者群像は、同志社の創立とほぼ創成を同じくする日本社会学の創成から形成にいたる期間、新島襄の

教育理想に共鳴した同志社の卒業生か、中退者、またはかつて同志社の教員であった内外人で、当時は今日とちがい維新以来の東西文化の混乱の中において、未だ学問が専門分化せず、社会学も社会哲学、倫理学、心理学、社会問題などと未分化の状況もみられ、純粋の社会学者とみることのできぬ状況もみられたが、それぞれの専門をもちながら社会学に関心をもち、日本文化の発展とくに社会学の発展と社会学教育の推進に寄与した人達である。私はできるだけ社会学的視点から、これらの人達をとりあげていきたい。（文中敬称略）

本　論

(一)　日本社会学の創成から形成へ

日本社会学[2]は大体明治のはじめ、オランダのライデン大学で学んだ西周（文政一二―明治三一、一八二九―一八九七）によってコントの思想が我が国に移入され、訳業では明治一〇年（一八七七）に尾崎行雄によってスペンサーの『権利提綱』が、重ねて明治一五年（一八八二）に乗竹孝太郎によって『社会学之原理』が訳され、講義では、明治一一年（一八七八）にフェノローサによって社会学の講義が、明治一四年（一八八一）には外山正一による正課の講義が東京大学で行われた時期を日本社会学の誕生とみてよいであろう。かくして明治の前半は東京大学の外山正一や有賀長雄などのスペンサーの社会学が優勢で、明治三〇年（一八九七）以後はコントの社会学と儒教的社会観を織りまぜた建部遯吾の社会学が、東京帝国大学の講座を背景に学界に活躍したのである。明治の末期となって創成期の生物学的社会学は衰退し、心理学的社会学が遠藤隆吉によって提唱され発展せしめられたのである。この頃までは大体東京が中心となっていたが、京都では多年欧米で社会学を研鑽してきた米田庄太郎が明治三五年（一九〇二）に帰国し、先ず同志社で教壇に立ち、ついで京都帝国大学に移って多年に亘り教壇に立ち、日本社会学の有力な指標となって多くの業績をのこし、特に愛弟子高田保馬の出現は、特殊個別科学としての社会学が世界的水準にまで高められたことに照応して、米

田庄太郎の評価も一層高揚されたようである。ここに日本社会学の形成期を迎えたということができるであろう。

(二) 日本社会学の創成期における同志社と学界の状況

さて、日本社会学の創成期において、同志社はどんな状況にあったであろうか。「同志社広告」として残された古い記録によると、それは明治一一年(一八七八)六月のものであるが「一、我輩同志ノ徒我国ニ於テ文学ノ隆興センコトヲ望ミ明治八年(一八七五)新ニ一社ヲ設ケ英学校ヲ開キ之ヲ名ケテ同志社ト曰ヒ米国宣教師ジェー・デー・デヴィス理学士ドワイト・ダブリフ・レールネッド等ヲ招シ普通学科ヲ教授セシメ且内外教師数名ヲ雇ヒ其足ラザル処ヲ補ハシム」(以下略)同志社々長新島襄、結社人山本覚馬となっている。

当時の同志社英学校では、ラーネッドによる経済学や社会主義の講義がなされ、明治一二年(一八七九)六月の第一回卒業式[3]では、卒業生全員それぞれ卒業演説をしたのであるが、浮田和民(のち早稲田大学教授)は「真正の知識」、山崎為徳(同志社の教員としてのこる)は「日本学術論」、吉田作弥(のち神戸女学院教師)は「スペンソルの説を評す」と題して演説し、校長新島襄は卒業生に「ゴー、ゴー、ゴーイン ピース。ビー スツロング。ミスティイリヨスハンド グワイド ユー。」の送別の辞を与えて励ましたようである。この制度は明治二〇年(一八八七)第九回卒業生までつづいた。兎に角、明治一〇年前後に同志社ではすでにスペンサーを社会学の問題として論議していたのである。

次に当時のわが国の社会学界の活動状況はどうであろうか。先ず社会学、社会問題の主なる著書を列記すれば、明治一六年(一八八三)有賀長雄『社会進化論、社会学・巻之一』『宗教進化論、社会学・巻之二』、明治一七年(一八八四)『族制進化論、社会学・巻之三』、明治二三年(一八九〇)辰巳小次郎『社会学』、明治二七年(一八九四)金井延『社会問題』、明治三一年(一八九八)岸本能武太『社会学』、明治三二年(一八九九)村井知至『社会主義』(Socialism)、明治三四年(一九〇一)浮田和民『社会学講義』、遠藤隆吉『社会学』、岡百世『社会学』、安部磯雄『社

会問題解釈法』、明治三五年（一九〇二）十時弥『社会学提要』、明治三七年（一九〇四）建部遯吾『普通社会学　第一巻　社会学序説』『理論普通社会学綱領』、明治三八年（一九〇五）『普通社会学　第二巻　社会理学』、明治四二年（一九〇九）『普通社会学　第三巻　社会静学』、明治四四年（一九一一）樋口秀雄『社会学小史』、大正元年（一九一二）米田庄太郎『社会学論』[4]などあり、これらを背景に、我が国においては東京帝国大学の建部遯吾を初めとして、明治三〇年から四〇年にかけて、社会学教育機関として社会学の講義のなされているところは一三学園にのぼっているが、そのうち同志社関係者が講座担当している学園名は、先ず、東京専門学校の浮田和民、東京高等師範学校の岸本能武太、同志社大学のロンバードなどあり、米田庄太郎も明治四〇年九月から京都帝国大学文学部の社会学の講義を担当した。[5]研究機関[6]では、明治三一―三六年（一八九八―一九〇三）にかけて、加藤弘之を会長とし、評議員に元良勇次郎、有賀長雄等、委員には岡百世ほか六名、其他留岡幸助、浮田和民等の協力によって社会学研究会が成立し、『社会学雑誌』を発行して社会の研究とその指導を目的としたのである。尚、明治一七年（一八八四）に井上円了、井上哲次郎、有賀長雄等によって「哲学会」[7]が成立し、機関誌『哲学会雑誌』が発刊され、これには哲学のほかに社会学関係の論文も掲載された。同志社関係では元良勇次郎、中島力造などの社会学関係の論文がある。

（三）同志社人並に同志社に関係深いひとびとの人間像と活動状況

(1) ドゥワィト・ホイットニー・ラーネッド（Dwight Whitney Learned）

嘉永元年―昭和一八年（一八四八―一九四三）

ラーネッドはアメリカのコネチカット州の人、エール大学に学びのち渡日し、新島襄、山本覚馬、デビス等と共に協力して同志社を創立し、明治九年（一八七六）四月一日同志社教授となり、昭和三年（一九二八）に帰国するまで五三年に亘り、同志社の教授として尽されたのである。彼については元同志社総長住谷悦治著『ラーネッド博士伝』「人と

思想」　未来社刊、一九七三年に集大成されている。彼は経済学と政治学を講義したほか、社会学、社会問題の領域まで広げて講義し、加えて天文学、物理学、後に基督教会史、教理史、聖書神学、新約聖書、希臘語、羅甸語など担当した。彼はエール大学でウルシー教授に経済学を学び、明治二四年（一八九一）に経済雑誌社から、米国哲学博士ラルネッド述浮田和民訳『経済学之原理』を出版し、この書において彼の社会観を展開している。それによれば、彼は経済学を産業社会の学なりとし、「経済学は事物の講究よりも寧ろ人間を講究する学で、その主とするところは社会である」[8]として、経済学を社会の学と思考したことを強調している。また彼は単に経済学の原理の攻究のほかに、第十五章「社会の状態」[9]において、第一　社会現今の状態　第二　革命的救治策（共産社会、社会主義、土地を国民の所有となすの方案）第三　政府の助力（社会的救治策）　第四　政府の助力を要せざる救治策（同業組合など）を五三頁に亘って開陳している。彼は経済学や経済政策の知見のほかに、社会学、社会問題、労働問題、社会主義にも造詣の深さをしめし、加えて彼の基督教的薫化が、彼の門下生からその精神の根底に社会改造、人間の形成に先駆的役割を果した次のような多くの学者、教育家、宗教家、文化人、社会事業家を輩出せしめたのである。例えば浮田和民、元良勇次郎、中島力造、大西祝、村井知至、岸本能武太、村上直次郎、下村孝太郎、三宅驥一、安部磯雄、海老名弾正、小崎弘道、宮川経輝、金森通倫、山室軍平、留岡幸助、徳富猪一郎などがある。

当時のわが国の社会思想の動きにおいて、一般知識人は基督教に対してどういう考え方をしていたか、について社会学者であり帝国大学文科大学長であった外山正一が、『社会改良と耶蘇教との関係』を明治一九年に丸善商社から世におくり、「孔孟の教をして封建制度を助けしめたる如く耶蘇教をして今日の社会改良を助けしむるは決して失策にあらざるならむ」[10]。又は「往時孔孟宗旨の我が邦に行はれたるは其の当時の時勢に適したる故なるが、将来我が邦の大勢に適するものは、孔孟宗旨にあらずして却って西洋宗旨なるが如し、」[11]と述べていることは、当時の知識人の一傾向をうかがい知ることができる。すなわちこの書の宣伝文句に、新説百出の社会に霧中方向に迷うとき、この書こそ社会改良

をねがう者にとって明るい標灯だとしている。

(2) 山崎為徳　安政五年—明治一四年（一八五八—一八八一）

彼は岩手県水沢の三秀才、後藤新平、斉藤実等とともにその一人といわれ、明治一〇年（一八七七）同志社の学風を慕って同志社に入学し、同志社に在学中も俊才として令名高く、明治一二年（一八七九）同志社英学校第一回卒業に際し、成績は首席で卒業演説として英語で「日本学術論」を行った。卒業後同志社教授兼幹事となり、母校の教壇に立つこと二年、彼の組織的で明晰な頭脳は、宗教・倫理・文学・哲学はもちろん自然科学の分野にまではたらき、シェイクスピアの戯曲や、ミルトンの「失楽園」を教授し、しかも学生の人気があったようである。彼の偉大なる所以は彼が若くして多くの外国書を渉猟して理解し、明治一四年（一八八一）に福音社より『天地大原因論』を刊行して、スペンサーの所論を批判したことである。彼の引用目録の一つをあげれば、スペンソル氏理学ノ評論　バヲン氏著 Prof. B. F. Bownes; *Review of Herbert Spencer's Philosophy.* Nelson and Phillips, N. Y. などがある。

さて『天地大原因論』によれば、先ず天地大原因論とは何かについて「何ノ原因アリテ天地万物変化スルヤ何ノ原因アリテ草木禽獣生育スルヤ是レ此ノ問題ハ数千年前ヨリ理学者ガ研究シタルトコロニテ今日欧米各国理学上最大ノ問題ト云フベシ」[12]からスタートし、次いでスペンソル氏神性不可識論ヲ駁スとして、「スペンソル氏カ曰ク万物ノ大原因ハ「インヒニー」トテ無極ノ性無極トハ力モ限リナク始メモナク終リモナシト云フ義ナリ　アルカ故ニ我輩人間有限ノ力ヲ以テ決シテ之ヲ識ル可カラスト素ヨリ造物主ハ無極ナレバ人間全ク其性ヲ識ルコト能ハサルハ勿論ノコトナリ然レドモスペンソル氏が大原因ハ少シモ識ルコト能ハズト論ズルニ至テハ我輩其説ニ左袒スルコト能ハザルナリ」[13]と反駁している。

最後に彼の人間像を彼のこの書の序文でうかがい知ることができる。「天地大原因論上ニ於テ欧米諸大家ノ著書許多

アリ我輩ハ其書ヲ閲シ其要ヲ摘シ且ツ日本方今ノ事情ヲ察シ纔ニ愚見ノ一二ヲ付シ以テ此ノ冊子ヲ成シタリ」[14]。と謙虚にのべているが、私はこれをよんで未だ前途春秋に富み、敬虔にしてしかも気骨ある彼が、不世出の資質をもちながらそれを充分に活用できず、未完成のまま夭死したことを惜しむのである。

(3) 元良勇次郎　安政五年―明治四五年（一八五八―一九一二）

彼は兵庫県三田の出身で同志社を中途退学して渡米し、ジョン・ホプキンス大学に学び、明治二一年（一八八八）東京文科大学教授となり、心理学の専攻であり我が国心理学界のパイオニヤー的存在である。彼もまた社会学に関心をもち、加藤弘之等とともに社会学研究会を設けて明治三二年（一八九九）に『社会』第一巻、第一号を発刊し、論説に「生活の標準」を掲載し、『哲学会雑誌』にも、「心理学ト社会学ノ関係」二四号、（明治二二）、「社会学範囲及ビ性質」五三号、（明治二四）などあり、又彼は明治三一年（一八九八）に『「破唯物論」を読む』を書いて、井上円了の『破唯物論』の研究方法に科学性の欠けている点を指摘して批判している。彼の著書には『心理学』明治二三年（一八九〇）、『倫理学』明治二六年（一八九三）、『心理学十回講義』明治三〇年（一八九七）、『心理学綱要』明治四〇年（一九〇七）等がある。

(4) 中島力造　安政五年―大正七年（一八五八―一九一八）

彼は京都府の福知山の出身で同志社を中途退学して渡米し、エール大学で学んで帰国して東大教授になった。倫理学、心理学専攻の学者で、特に倫理学ではグリーンの自己実現説に関心を示し、またそれと関係してスペンサーの功利思想の研究から社会学にも深い関心をもっており、その知見の一端は『倫理学説十回講義』に展開されている。すなわち同書の第十回においてコント社会学[15]にふれ、一個人の行為は一個人の行為として研究すべきでなく、つねに社会的に社会

と如何なる関係があるかを考え、倫理学と社会学との関係を指摘し、コントが晩年人類教を唱えたのは、道徳とは社会のために働くという意味からコントの倫理性を展開している。また、スペンサーについては「スペンサーといふ人は古来数百年間の倫理に関する争論を悉く綜合せんと謀った人である。而して其の調和綜合は近世の生物学者が唱へた進化といふことを原理として調和する積りであった」[16]と述べ、最後に、倫理学と他の学術との関係において、「次に今日の倫理学研究者は社会学を学ばねばならぬ。即ち人は社会的生活をなしているので社会学を知らずしては倫理の研究は出来ぬ」[17]と結んでいる。其の他、イギリスのホッブハウスやウェスターマルク、アメリカのデューキやタフトにまで論及している。著書・論文では先ず社会学関係を先にして前述の、『倫理学説十回講義』明治三一年（一八九八）、『スペンサー氏倫理学説』明治四〇年（一九〇七）、論文に「スペンサー自叙伝を読み所感を述ぶ」『哲学会雑誌』第二〇巻二一九号明治三八年（一九〇五）其他『ヘーゲル氏弁証法』明治二四年（一八九一）、『心理撮要』『論理撮要』明治三一年（一八九八）、『論理学講義』『倫理学講義』明治三四年（一九〇一）などがある。

(5) 浮田和民　安政六年―昭和二一年（一八五九―一九四六）

彼は熊本県出身で明治四年（一八七一）熊本洋学校に入学、校長ジェーンスの人格に感化され、明治九年（一八七六）に卒業し、同年同志社英学校に入学し、専ら哲学、神学を学び、明治一二年（一八七九）に卒業し、卒業演説は「真正の知識」であった。明治一九年（一八八六）より同志社教員となり西洋史、文明史、政治学を担当し、その間三四歳から三六歳までエール大学でラッド教授について史学、政治学、政治史を研鑽し、社会学に関心を深め、明治三〇年（一八九七）に東京専門学校（今の早稲田大学）に迎えられ、西洋史、政治学、社会学を担当し、明治三四年（一九〇一）に『社会学講義』を公刊し、昭和一六年（一九四一）に早稲田大学を退職し、名誉教授に推挙された。早稲田在職中に博文館発行の月刊雑誌『太陽』の主幹となり、社会教育にもつくした。

彼は『社会学講義』において、㈠社会は物質的基礎によって建設せられたる精神的組織体であり、[18]㈡社会学は社会組織の本質を研究する学問であり、[19]㈢国家は人格を発達せしめる唯一の方法、最高の機関であるからこれを目的としてゆくべきであると述べ、[20]彼はタルド、ギディングスなどの心理学的社会学をとり入れ、社会有機体論から心理学的社会学[21]への傾向を示している。

彼の学問的傾向については、永らく早稲田大学で社会学を担当していた松田治一郎が、「社会教育家としての浮田先生」と題して、「明治三十年頃の日本の社会学と云へば、今日一部の学徒の謂ふ所の綜合的、百科全書的社会学であったが、その綜合的、百科全書的社会学であったことが寧ろ先生の好んで研究されるようになった所以でもあらうと思ふ。社会を如何に改良すべきかが両先生（浮田和民、安部磯雄）の主題であったのだから、社会学が学として果して可能なりやなどの問題は、別に問ふ所ではなかったらう。かかる意図から社会学を研究されたのであるから、社会問題に特に関心をもたれた安部先生が経済学を講ぜられるように、政治、外交に専ら意を注がれた浮田先生が西洋史と共に政治学を講義されたのも、極めて当然なことと思ふ。併し御両人共、このやうな関心の相違から、社会の違った方面に努力されたが、その態度におかれては終始一貫少しも変る所がなく、青年時代に養はれたキリスト教的精神に基く人道的、道徳的立場を固守された。即ち青年時代に受けられた指針と情熱とを以て一生を貫かれたのである」。[22] と『浮田和民先生追懐録』において両人が社会の教化や大衆の啓蒙につくしたことを指摘している。

彼は永い教員生活においてその教育観は、同志社時代に培われた自由精神に基く人間教育にあったようである。即ち自由を必須条件としないで人間教育は不可能であるといっている。尚、彼は晩年「楽天知命故不憂」の境地にあった。私はかつて同志社のアーモスト館で彼の謦咳に接したことがあるが、風丰、論調ともに儒教の素養の上に築かれた基督教的人格主義の自由人としての感触をうけたのである。

(6) 村井知至　文久元年―昭和一九年（一八六一―一九四四）

彼は松山の出身で明治一四年（一八八一）の九月に同志社英学校普通科第三年級に編入し、安部磯雄、岸本能武太と同級であり、卒業演説は「人間終局の目的」であった。彼は基督教の人道主義者であり、安部磯雄等と共に社会主義研究会を組織し、会員には幸徳秋水等もいた。彼の生涯については自伝ともいうべき、昭和二年一一月（一九二七）警醒社書店発行の『蛙の一生』に、また、彼の社会主義思想については、昭和三八年（一九六三）みすず書房発行の住谷悦治編『日本におけるキリスト教と社会問題』の住谷悦治「明治キリスト教徒の社会主義思想（一）」と、村井知至の『社会主義』に詳しく展開されている。さて彼の経歴を『蛙の一生』[23]からスケッチすれば、彼は同志社では新島襄に感化され、アンドヴァー神学校ではモーワ博士について比較宗教と聖書を、タッカー博士について社会問題の研究をなし、この間、社会事業の泰斗といわれたウードの「英国に於ける新社会運動」の講演をきいて社会問題に身をうちこむことに決意したようである。社会主義と基督教との関係については、社会主義は基督教の経済的方面で、基督教は社会主義の倫理的方面であるという観念をもっていた。彼は明治三二年（一八九九）に労働新聞社から『社会主義』という一六四頁の小冊子を出版したが、この書の序文に同志社出身の横井時雄は「友人村井君は社会問題に於て吾人が推服する先輩なり」と記している。

村井知至は先ず社会主義の定義としてイリー教授の説をあげ「社会主義とは工業社会に於て新に計画せらるる社会制度にして偉大なる物質的生産機関に於ける私有財産を廃し、之に代へて合同資本を作り更に各人協同して生産を取り行ふべきを唱へ、社会が公平に社会収入を分配し、此分配の多分は各個人の私有財産たるを許すべきを主張する者なり」[24]と述べて最後に理想社会を論じ「社会主義の理想社会は社会と個人と各相調和し協同して社会全躰の幸福を営むものなり、而して個人は社会に対して責任を負ひ社会も亦個人に対して責任を負ひ互に責任を以て相関聯するのみ、故に社会主義の理想社会は則ち責任社会なり」[25]と結んでいるが、尚もその根底に流れている哲学を彼は次のごとく提示している。

すなわち「近代の社会主義は啻に一種の改革案にあらずして、実に活ける宗教なり、血と涙あるヒューマニティーの道なり、是れ実に時代の宗教にあらずや。苟くも人道に志し、社会の改善を憶ふ者は、其の身を献げ、其力を尽して斯の大主義の為に斃れて可なり」[26]と述べて、その中心思想は基督教の人格主義であった。

彼は大正四年（一九一五）に四方堂書店より『無絃琴』を出しているが、この中で「理想は汝の中に在り」とか「日々の業務を霊化し、日々の生涯を充実しつつ進む者は、遂に理想の大人格たるを得ん、是れ成功の秘訣にして亦修養の根本義なり」[27]と述べて、基督教的理想主義を標傍している。彼は東京外国語学校、日本女子大学の教授として多年語学の教授をなし、また第一外国語学校長として教育事業に生涯をささげたが、彼は単に語学の教授のみでなく、常に学生に精神教育を扶植したのは、彼が同志社時代に新島襄初めデビス、ラーネッド等の薫化によったものとおもう。

(7) 大西祝　元治元年―明治三三年（一八六四―一九〇〇）

彼は岡山の出身で操山と号し、明治一四年（一八八一）同志社英学校を卒業して東京大学に学び、早稲田大学の教壇に立ちドイツに留学中病をえて帰国、京都帝国大学の教授となった哲学者、倫理学者であるが、社会学にも深い関心を示し、当時『六合雑誌』誌上新設の「時論」欄に於て、宗教、道徳・哲学とともに社会学についても筆陣をはった。例えば「流行論」において「流行は人類の社会において始めてみられる、これ人間に模倣の性あればなり、人間は新奇を悦ぶの心あり、旧きに飽ける工合を洞察して其の変動の趣と勢に乗じて流行を創始するのである」[28]として模倣論を展開し、社会心理学的視野の広さを示し、また、「社会主義の必要」においては「予輩は現社会に社会主義を唱ふるの必要あることに眼を覆ふ能はず而して宗教は由来社会主義と親しかるべき筈のものなりと考ふ予輩は宗教を説く者が今一度大担に平等主義を主張せむことを希はずばあらず」[29]と結んでいる。彼の著書には『良心起源論』明治二三年（一八九〇）、『西洋哲学史』明治二八年（一八九五）などあり、論文には「批評論」（『国民の友』）明治二一年（一八八八）。

彼は偉大なる哲学者であるが、同時に啓蒙主義的、批判主義的精神に生きた社会科学者としての一面もうかがわれるのである。

(8) 岸本能武太　慶応元年―昭和三年（一八六五―一九二八）

彼は岡山の出身で明治一七年（一八八四）に村井知至、安部磯雄等と共に同志社英学校普通科を卒業し、重ねて、彼は明治二〇年（一八八七）に英語神学科を卒業し、東京に出て村井知至等と共に社会主義研究会のメンバーとなり、社会学はスペンサーの社会有機体説によった理論を立てて『社会学』（*An Outline of Sociology*）を世におくり、東京専門学校（今の早稲田大学）や高等師範学校の教壇に立ったのである。この書は明治二九年（一八九六）に東京専門学校でなした講義を同校の講義録に載せたもので、先ず社会学の定義として「社会学は先ず社会の現在及び過去を研究して、社会の要素、性質、起源、進化及び目的を発見し、次ぎに社会を組織する衆個人は将来如何なる方法により社会の進化を促進し、人生の目的を大成すべきやを講究する学問なり」[30]とし、社会現象研究の三方面[31]として(1)社会の分析的研究、(2)社会の歴史的研究(3)社会の哲学的研究をあげ、社会学研究の利益については[32]、(1)学術研究上の利益と(2)社会革新に対する社会学研究の利益をあげ、特に後者については、社会学は政治、教育、道徳、宗教上の革新者をあやまちなきように育成する力をもち、見識と勇気を与えるものであるとし、「社会全体の現象を綜合的に研究し、又過去現在将来を一貫する社会進化の原則を探求する社会学は、正さに此の場合に於て、全局の知識と将来の予測とに関し必要なる扶助を与ふるものにして、是れ社会革新事業に対する社会学の利益に外ならざるなり」[33]と述べ、結論において円満なる幸福に必要な条件として(1)天然の征服(2)社会の改良(3)個人の教育をあげ、理想的人間の理想的社会の形成にありとしている。[34]このことは彼の社会学が今日でいわれている社会の分析という科学的社会学という側面もみられるが、他方、基督教を背景とした社会的側面を強調した社会哲学的な特質も看取される。尚このほかに彼の見識を知る資料として次のものが

ある。

彼は明治三三年（一九〇〇）に『倫理宗教時論』を書き、これは雑誌『宗教』の「時評」欄に、また『六合雑誌』の「時論」欄に世に公けにした論文を輯めたもので、この中に基督教社会主義の立場を示す論文もみられる。例えば同書の宗教之部第一二に「我国の識者須らく基督教を研究すべし」のごとき、また「基督教の取捨は暫く惜き、基督教を知らざれば此等の基督教に連帯せる事業を解するに於て遺憾あるべし、従って同じ事業を我が社会に挙行するに於て参考上大に損する処あるべし」と結んでいる。松本潤一郎は彼の『日本社会学』において、岸本能武太の『社会学』について、「これは外国学説の紹介たると同時に、社会有機体説に立脚する頗る組織的論述たる点において、従来の著作に比較し一歩を進めたものであった」[35]。と高く評価している。

(9) 安部磯雄　慶応元年―昭和二四年（一八六五―一九四九）

彼の経歴については、自叙伝『社会主義者となるまで』[36]によれば、彼は福岡の出身で、明治一二年（一八七九）九月同志社英学校に入学し、ラーネッドの政治・経済学の講義によって社会主義に開眼し、彼が卒業演説で『宗教と経済』という題を選んだのも、精神生活は宗教により、物質生活は経済学により指導せらるべきとの考えからであった[37]。同志社を卒業後二ヶ年同志社の教師となり、のち岡山教会の牧師を経て明治二四年（一八九一）七月にアメリカに渡り、ハートホード神学校に入学し、三年間聖書や社会問題を研究し、その間の消息を「私は基督教の人道主義によりて将来社会主義者となるべき素地を与えられていた。然るに今や社会事業が貧乏撲滅の方法として不充分であることを覚った。私は最早や一歩で社会主義の領土に踏み入るといふ所まで進んでいたのだ。丁度其時私は偶然にもベラミーの小説ルッキング・バックヲードを読んだ。私はハッキリと社会問題解決の方法を会得することが出来た」[38]と述べている。ここから英国に渡り、独乙を経て帰国した。明治三四年（一九〇一）に社会民主党を結成し、この年に『社会問題解釈法』を

世におくった。これは彼の処女出版で、社会主義だけが貧困という重症を根治できるという基本的態度で一貫したレベルの高いものであった。この四月に社会問題研究会が発足し、また、早稲田大学教授となり、『日本社会主義論』明治三六年（一九〇三）、『労働組合』明治三七年（一九〇四）など矢継早に上梓し、大正四年（一九一五）に日月社から『最近の社会問題』を出版し、この書は、社会学、社会問題、社会政策などの術語を明確にし、社会問題の中心は労働問題で、経済的分配を公平にし、工場法の制定、労働保険の設立や社会政策にまで及んでいる。特に大正一〇年（一九二一）早大出版部で出した『社会問題概論』は、彼の社会学、社会問題、社会病理学の全貌を明らかにしたもので、先ず社会学の研究範囲として「社会の起源、発達、組織、活動及び理想を研究することは社会学の目的である」[39]とし、我々は生きるために食うのであるから「私共は今日の社会を改造して人類が生きるために、食ふということを実行せられるような社会を現出せねばならぬ」[40]と理想社会の出現を期し、社会学と社会病理学については「生理学が身体の全部を研究する科学であるとすれば、社会学は社会の全般を研究する科学で、病態にあるときの身体を研究するときは生理学の領分を越えて、むしろ病理学の領分に入るのである。社会学もまた病態を研究する場合、社会病理学といわれる。（省略）また社会問題は病態にある社会を研究し、その疾病の原因を討究するとともに、其の救済法をも取扱う所の科学である」[41]とし、最後に社会主義の哲学として、(1)社会主義の主張は自由・平等・博愛である。[42] (2)社会主義は経済組織を改造することにより、初めて自由・平等・博愛の精神を完全に実現することができるという主張である。[43]結論として帰着するところは教育問題であり、若し労働者の教育に成功できれば、凡ゆる社会の疾病を根治することができるだけでなく、極めて平和的に社会改造の一大事業を成就することができると結んでいる。[44]

彼は敬虔なクリスチャンとしてまた学者として同志社や早稲田の教壇に立ち、やがて社会大衆党中央委員長として政治活動、社会運動に挺身し、昭和四年（一九四九）二月多彩な生涯を閉ぢたが、終始温容をたたえ、ほのぼのとした慈味あふれる人格者であった。著書には専門書の他、『理想の人』明治三九年（一九〇六）、『自修論』大正三年（一九一

四)、『社会主義者となるまで』昭和七年(一九三二)、『青年と理想』昭和一一年(一九三六)などがある。

(10) 米田庄太郎　明治六年―昭和二〇年(一八七三―一九四五)

彼は奈良の郡山中学から英和学校を卒業し、同校の米人講師アイ・ドウマンにその才を認められて共に渡米し、彼はコロムビア大学でギディングスの下で、またパリのコレジュ・ド・フランスでタルドの下で心理学的社会学を主として研究し、また、ドイツのジンメルの社会学に関心をもち、特に『社会分化論』の影響を受けた。在外生活一二年の後明治三五年(一九〇二)に帰国し、先ず同志社の教授となり、社会学、統計学、仏語の講義をした。彼は就任するや同志社校友会に入会し、新島襄の思想と信仰に共鳴した。米田庄太郎の就任の経緯について、当時の同志社臨時校長の下村孝太郎[45]の報告によれば「又兼々同志社の卒業生と交誼あり、米国紐育のゼネラルセオロジカルセミナーを最優等での成績を以て卒業し、コロムビア大学のギディングス巴里大学のタードに就て社会学を研究して帰朝せし米田庄太郎君も同志社の主義精神を愛して来校せり」とあり、加えて創立以来の諸教授の名をあげて「同志社創立以来恐らく今日程教授の手揃を見しことは多くあらざるべし」と結んでいる。彼は同志社から京都帝国大学へ移り、昭和二〇年(一九四五)死去した。彼は優秀な語学力を駆使して海外の社会学説を精力的に我国に紹介・移入し、学界に多大の貢献をもたらしたのである。彼の社会学体系は彼の生存中の労作にもみられるが、また死後昭和二三年に関書院から出版された『輓近社会学論』にも現われており、彼は社会学を「(1)純正社会学、(2)総合社会学及び(3)組織社会学或は社会科学一般方法論の三部門から成立する[46]」とし、その流れは心理学的社会学から形式社会学へ、彼の未完成の体系は門下生高田保馬によって完成されたといえるであろう。次に大正一〇年(一九二一)改造社から出版の『現代文化人の心理』は、当時流行の文明・文化についての社会学的研究で、現代文化の諸問題や社会問題を理解するには、その背景をなす心理現象の究明が必要であり、この意味で文化社会学的色彩もただよわせている。彼の天才的語学力は彼の学問領域を拡大し、深化し、

また多様化して、単に社会学の領域のみならず、広く文明論、文化論、社会問題、社会運動、歴史哲学にまで及んでいる。

彼は同志社々長原田助の時代に退職したのであるが、同志社は彼が専門学校教授を経て大学教授となり、永年本社のため鋭意尽瘁した彼に感謝と慰労の意を表明した。

彼の主なる著書には『現代人心理と現代文明』大正八年（一九一九）、『輓近社会思想の研究』三巻、大正八年―大正九年（一九一九―二〇）、『現代社会問題の社会学的考察』大正九年（一九二〇）続篇大正一〇年（一九二一）、『歴史哲学の諸問題』大正一三年（一九二四）等あり。

(11) フランク・アランソン・ロンバード（Frank Alanson Lombard）

明治五年―昭和二八年（一八七二―一九五三）

明治三四年（一九〇一）の同志社のカリキュラムをみれば、当時の社会学担当の教授には、オーティス・ケーリ、フランク・アランソン・ロンバードの名がでている。

彼は米国マサチューセッツ州に生まれ、アーモスト大学に学びM・Aをとり、ついでハートフォード神学校を経て来日し、一九〇〇年（明治三三年）から一九二六年（大正一五年）まで日本に住み、その間、同志社教授として主としてシェイクスピアーを中心として英文学、英文学史、聖書文学、教育学、社会学を担当し、学外では京都帝国大学へ講師として英文学を担当し、北京大学へは交換講師として出講したこともある。

さて彼の担当の社会学の講義の状況に関して、当時の教務文書で講義内容やテキストについて調査したが詳かならず、古い卒業生に問合わせても要領をえない。彼は英文学の外に、特に「日本の文学、歴史、国民性等に関心を示し、日本の教育、劇、和歌、民謡等についての研究をなし」[47] その成果が(1) *Pre-Meiji Education in Japan, A Study of Japanese Education previous to the Restoration of* 1868, 1914. (2) *An Outline History of the Japanese Drama*, 1928.

となったのであろう。(1)は明治以前の我が国の教育の流れを対象とし、教育現象を実証的・客観的にとりあげた教育社会学的労作であり、特に彼の教育に関する見解は人間を作る過程であるとし、"Education is a process for the making of men. Men are social beings; and among the problems of education none is more fundamental than that which concerns the basis of training in social relations, the basis or sanction of ethics."[48] と述べている。本書は一一章から成立ち、教育の制度や組織から初まり、教育課程、社会教育、教育の諸問題等を取扱い、(2)は歴史的に我が国の神楽、田楽から歌舞伎にいたるまでのドラマを展開している。彼は一九〇三年九月から教育学・心理学等の特別研究のためクラーク大学で勉強し、翌年帰校しているから、恐らく彼の社会学の内容は教育社会学的なものと推測されるが、この点については、今後の研究課題として具体的に明らかにしていきたいとおもう。

最後に応用社会学または実践社会学としての社会福祉の領域に入り、オーティス・ケーリと留岡幸助をとりあげたい。

(12) オーティス・ケーリ Otis Cary

嘉永四年—昭和七年（一八五一—一九三二）

彼は米国のマサチューセッツ州に生まれ、アーモスト大学を経て（新島襄の二年あと）、アンドヴァー神学校に学び、一八七七年（明治一〇年）に卒業、B・Dの学位をえて先ず組合教会の宣教師となり、一八七八年（明治一一年）来日し、神戸を経て岡山に赴任し、つづいて大阪に移り伝道と社会事業に従事し、その影響は広く且つ深いものがあり、今日、岡山の博愛社、大阪の淀川善隣館もその伝統を彼からうけている。一八九〇年（明治二三年）同志社神学校講師となり、一八九二年（明治二五年）教授となり、説教学及び実践社会学を担当し、一九一八年（大正七年）定年帰国するまで在職した。実践社会学は現今の社会福祉概論や社会事業方法論にあたり、彼の講義はその先駆をなすもので、少く[49]

とも明治・大正時代の日本の社会事業の主なものが基督教の影響の下で活動したとすれば、同志社神学校でのこれらの学科目の講義が貢献したものとおもわれる。尚、これらの他に同志社が神学教育上特に求めたものは実践的教育だったので、彼は草鞋伝道といって毎日曜日同志社の神学生と近江地方に伝道行脚に出かけたようである。彼はまた歴史に深い関心を示し、この研究の成果が *A History of Christianity in Japan*, in two volumes. に結実し、これは彼が一九〇七年にアンドヴァー神学校での Hyde Lecture の基礎となった。また日本における先駆的な労作でもあった。彼の著作の主なるものはこの他に当時評判になって版を重ねた *Japan and Its Regeneration* (New York, 1899) *The Later Cary Poems.* などがあり、退職後ユタ州で数年間在住し、日系人の間で伝道しつつ書いた *A History of Children in New England.* などがある。一九〇四年にアーモスト大学よりD・Dの名誉学位をうけ、また同志社や神戸女学院の理事もした。彼は敬虔な宣教師であり、聡明な歴史学者、社会学者であり、また使命感に生きた社会事業家でもあった。

彼に三男一女あり、三男フランクは主に北海道に、長女アリスは大阪の善隣館で社会事業家として、また宣教師として活躍し、フランクの長男で彼の孫にあたる同名のオーティス・ケーリ教授は、アーモスト大学の代表教授として、一九四七年（昭和二二年）より同志社大学につとめ、現在文学部で米国文化史を講じている。

(13) 留岡幸助　元治元年―昭和九年（一八六四―一九三四）

彼は岡山県高梁で生れ、明治二一年（一八八八）同志社の別科神学科神学課程を卒業した。彼は少年時代から儒教に親しみ、仁義道徳を重んずる心情にあり、加えて青年時代に基督教徒となって魂の救いを求めるとき、つねに彼の心に矛盾として去来するものは、人間に運命的に課せられた道徳と経済の問題であった。彼は恐らくこの苦悩の解決を自己のライフワークとしたのであろう。私は彼の七〇年の多彩な生涯をかえりみて、次の五つの特質をあげてみたい。

第一に彼はヒューマニティゆたかな信仰の厚い実践的な宗教家であった。これが若くして丹波第一教会、ついで霊南坂教会の牧師として伝道せしめ、その実践の場として北海道空地集治監の教誨師たらしめ、囚人の生活にふれて監獄法の改良の必要性を説かしめたのであろう。その根底には滾滾として基督教ヒューマニズムが流れていたのである。彼が当時すでに死刑廃止論を唱え、人類の生命を奪うは人道の許さざるところと叫ばしめたのである。第二に彼は教育家として非行少年救済のために家庭学校を創設して校長となり、感化教育事業に身を捧げたのである。彼の教育観はルソーやペスタロッチの影響の下で、家庭と自然と農業に視点をおいて、人間形成を試みたのである。一木喜徳郎は「翁が少壮にして夙くも監獄改良の必要なることに着目し、更に進んで感化事業を創始し、社会事業界に偉大なる足跡を貽されたことは、今更喋々の要はないであらう」[50]と述べている。第三に思想家としての彼は、明治三一年（一八九八）に成立した社会学研究会に浮田和民等とともに委員として名をつらね、彼の思想は多元的で、あたかも交響楽の指揮者のごとく、基督教ヒューマニズムを基盤とし、その上に二宮尊徳の報徳主義やジョン・ラスキンの精神を統一融合して、産業資本確立期の社会改良事業の理念としたのである。第四に理論家として、しかも彼は実践に裏付けられた理論家として、地方改良事業に抜群の成績をあげたのである。彼は内務省[51]の嘱託として静岡県に出張し、社会施設としての報徳社が優秀な成績をあげている点を調査した結果、その原因は二宮尊徳の道徳と経済との調和が実践されている点を発見して、爾来、尊徳の報徳主義を普及し、地方の改良事業に新風をおくり、特に農業と勤労に焦点をおき、「力田而食布衣亦尊」を信念として『農業と二宮尊徳』を警醒社から公刊した。かくして彼が少年時代からいだいていた道徳を縦に、経済を横に調和した理想が実現したのであるが、これは、二宮尊徳が農業を背景に自然を礼讃し、道徳と経済との併行を唱え、社会機関としての報徳社をもち、ジョン・ラスキンが商業を背景に自然を礼讃し、道徳と経済との併行を唱え、社会機関としての聖ジョージ・ソサエチーに教えられたものである。[52]彼はこれらの思想と体験の背景の下に『基督教新聞』の編集責任者となり、月刊誌『人道』を創刊して主筆となり、時には政府の施策を鋭く批判して、よりよきものへ

と推進したのである。第五に彼の人格とその姿勢として、基督教の信仰によって人間の個の充実と完成をはかるだけでなく、つねに個をつつむ社会の幸福と平和と発展に目をむけ、これを推進するのに理論のみでなく勤労という実践を通して実現していく力の人であった。彼はまさしく我国における慈善事業の開拓者であり、社会事業の先覚者であるといえよう。彼の著書には『感化事業の発達』明治三〇年（一八九七）、『慈善問題』明治三一年（一八九八）、『獄制沿革史』明治三三年（一九〇〇）、『二宮翁と其風化』明治四〇年（一九〇七）、『社会と人道』明治四三年（一九一〇）など他多数の著書や論文がある。

結　語

以上一三人の人達は、それぞれ違った経歴と専攻、職業と国籍をもっているが、共通していえることは何れも新島襄、デビス、ラーネッド等の思想や人格に共鳴し、共感して自己の完成を超えて社会に大きな目を開いた人達で、つねに日本社会の平和と発展を志向している。新島襄は同志社は良心を手腕に運用する人物を造るに在りといっている。ここに結語として同志社の設立の目的と使命に溯って総括することが、かえって一三人の人間像を明確にし、それぞれの業績の理解に役立つであろう。

同志社教育の目的や理念は、新島襄の晩年に出された「同志社大学設立の旨意」や、同志社に対する遺言によって示されている。すなわち設立の旨意によれば「斯くの如くにして同志社は設立したり、然れども其目的とする所は、独り普通の英学を教授するのみならず、其徳性を涵養し、其品行を高尚ならしめ、其精神を正大ならしめんことを勉め、独り技芸才能ある人物を教育するに止まらず、所謂る良心を手腕に運用するの人物を出さん事を勉めたりき」[53]とあり、また遺言の一節には、「同志社教育の目的は、其神学、政治、文学、科学等に従事するに拘らず、皆精神活力あり、真誠の自由を愛し、以て邦家に尽す可き人物を養成するを務む可き事」[54]などをのこしている。彼の抱懐する教育理念は、基

督教による徳化を核として、文学、政治を興隆する。その核心は精神主義である。したがって同志社の学風もまたきびしく錬磨され、その表現として彼の詩に「真理似寒梅　敢侵風雪開」とあり、よりよく生きんがための社会の改造のためには、先ず個人の改造を必要とし、その根底に基督教ヒューマニズムをおいたのである。

かつて桑木厳翼は『浮田和民先生追懐録』の中で「元来早稲田の老教授中には、同志社出身の人が非常に多く、皆一種の気風を示して居た。其の中には英語の教師として英書を通じて政治経済上の知識を伝えていた人もあるが……以下略」この場合、「一種の気風」これが同志社で培養された独特の基督教ヒューマニズムや基督教デモクラシーでなかろうか。(55)

まことに明治維新以来、五十年余に亘る同志社の基督教ヒューマニズムに基く開拓者的精神と運動は、我が国の明治文化の開花発展にいささか役割をはたし、大正時代に入っては同志社は海老名弾正を総長に迎え、わが国の大正デモクラシーの推進のため努力したのである。

追記　小文を作成するにあたり、同志社大学人文科学研究所、社史史料編集所、並びに河村望『日本社会学史研究』上・下、斉藤正二『日本社会学成立史の研究』に負う所多く、衷心より感謝の意を表したい。

注

(1) 同志社大学人文学会『人文学』第五七号、一九六二年四四―五八頁。
(2) 「日本社会学」（福武・日高・高橋編『社学学辞典』有斐閣、一九五八年）六九八―六九九頁参照。
(3) 青山霞村『同志社五十年裏面史』からすき社、昭和六年、七〇―七三頁参照。
(4) 河村望『日本社会学史研究』上、人間の科学社、一九七三年、並に斉藤正二『日本社会学成立史の研究』福村出版株式会社、一九七六年の文献年表より引用。
(5) 斉藤正二『日本社会学成立史の研究』福村出版株式会社、一九七六年、二四〇頁参照。
(6) 同右、二三八―二三九頁。

(7) 同右、二三六—二三八頁。
(8) ラルネッド述 浮田和民訳『経済学之原理』第一頁緒論第一款経済雑誌社、明治二四年、一頁参照。
(9) 同右、四七五—五二八頁参照。
(10) 外山正一述『社会の改良と耶蘇教との関係』丸善商社書店、明治一九年、六〇頁。
(11) 同右、六一頁。
(12) 山崎為徳『天地大原因論』全 福音社、明治一四年、一頁。
(13) 同右、三頁。
(14) 同右、自序。
(15) 中島力造編『倫理学説十回講義全』富山房、明治三一年、三一四—三一六頁参照。
(16) 同右、三六四—三六五頁参照。
(17) 同右、四〇〇—四〇四頁参照。
(18) 浮田和民講述 帝国教育会編纂『社会学講義』開発社、明治三四年、一二三頁。
(19) 同右、四三頁。
(20) 同右、四一五頁。
(21) 同右、「第六章社会心理」、一九〇—二五四頁参照。
(22) 故浮田和民先生追懐録編纂委員会『浮田和民先生追懐録』昭和二三年、二三五頁。
(23) 村井知至『蛙の一生』警醒社書店、昭和二年、八五—八六頁参照。
(24) 村井知至『社会主義』労働新聞社、明治三二年、一三頁。
(25) 同右、一四四頁。
(26) 同右、一四三—一四四頁。
(27) 村井知至『無絃琴』四方堂書店、大正四年、六六—六七頁。
(28) 大西祝「流行論」(『大西博士全集』「六合雑誌」中篇、第一八一号、明治二九年一月)四五七—四六〇頁。
(29) 大西祝「社会主義の必要」(『大西博士全集』「六合雑誌」中篇、第一九一号明治二九年一一月)五一四頁。
(30) 岸本能武太『社会学』大日本図書株式会社、明治三三年、二九頁。

(31) 同右、一〇—二二頁参照。
(32) 同右、四〇—四四頁参照。
(33) 同右、四五頁。
(34) 同右、三五三—三八〇頁参照。
(35) 松本潤一郎『日本社会学』時潮社、昭和一二年、七—八頁。
(36) 安部磯雄『社会主義者となるまで』改造社、昭和二七年。
(37) 同右、一〇二—一〇三頁参照。
(38) 同右、二〇一—二〇三頁。
(39) 安部磯雄『社会問題概論』早稲田大学出版部、大正一〇年、二頁。
(40) 同右、一三頁。
(41) 同右、一三—一四頁（要約）参照。
(42) 同右、七二〇頁。
(43) 同右、七二一頁。
(44) 同右、八三八頁（要約）参照。
(45) 同志社社史史料編集所所蔵の教育文書による。
(46) 米田庄太郎『輓近社会学論』関書院、昭和二二年、二三九頁。
(47) 木下八三「恩師ロムバード先生を憶ふ」（『L・L・L』三二号同志社英文学会一九五三年）二頁参照。
(48) Lombard, F. A., *Pre-Meiji Education in Japan*, 1914, p. 227.
(49) 本文作成については、同志社社史史料編集所所蔵の教務文書、ケーリ家からの資料並びに *Encyclopedia of Japan.* の記録に負うところが多い。
(50) 中央報徳会編『留岡幸助報徳論集』中央報徳会、昭和一一年、一—二頁。
(51) 留岡幸助「二宮尊徳とジョン・ラスキン」（『留岡幸助報徳論集』昭和一一年）三一六—三一七頁参照。
(52) 同右、三一八—三一九頁参照。
(53) 同志社『同志社九十年小史』昭和四〇年、第一章総説四頁参照。

(54) 同右、「新島襄遺言の一節」。

(55) 桑木厳翼「同志社系早稲田人浮田和民博士」（『浮田和民先生追懐録』故浮田和民先生・追懐録編集委員会昭和二三年）一〇頁。

〈付記〉

執筆者は、昭和五十三年三月、本学を定年退職された。本稿は、在職中に脱稿したが、編集の都合上本号の掲載となった。

（編集委員）